

1 章

序 章

1 本書の目的

本書では、上代から近現代における膨大な言語資料のなかで、温度感覚語彙が実際にどのように使用されているかを調査し、記述したうえで、それらの意味・用法の分析・考察を行ない、歴史的な観点から日本語における温度感覚語彙を論じる。

現代語においては、低温に関する表現のうち、「寒い」と「冷たい」があり、その相違について、すでにさまざまな分類や規定が行われている。この2語の初出に関しては、「寒し」の初出例は『日本書紀』において見られたのに対し、「冷たし」は10世紀末頃成立した『落窪物語』において見られ、「冷たし」の成立が比較的遅い。この2語の歴史的な使用状況について、近代以前の使用は現代語と同様の区別が完成したものと見られる。しかし、その分化の過程についてはまだはっきりしていないところがある。また、上代にすでに見られる「寒し」は長い歴史のなかで、どのような有様を呈し、使用され続けられてきたのか、そして、日本の言語生活がどのように反映されているのか、といった側面からの探求も、感覚語彙の全貌および全体的な推移を明らかにするには必要不可欠である。さらに、和語の

温度感覚語彙のみならず、それを表す漢字によって構成される漢字表記語も研究の対象とする。ある特定の時代における個別の漢語を取り上げ、漢語の構成やその語の成立する時代背景、定着する理由について行なっている研究は数多く存在しているが、温度感覚を表す漢字による漢字表記語の歴史的な振る舞いおよび推移、またその使用傾向に関して詳しく調査・考察を行なう研究はまだ乏しい状態である。感覚語彙に関して、手のつけられていない課題が山積しているが、本書では温度感覚語彙の歴史に焦点をしばって研究していく。

近年、データベースの整備・公開が進んでおり、大量な言語資料を比較的集めやすくなっている現状である。それにより、主観的に記述すること、言語資料のジャンルによって偏っている調査結果が出ることを避けられるようになっている。すなわち、大量な用例により、客観的な事実に基づき、通時的な観点から温度感覚語彙がまだはっきりしていない部分を明らかにすることが可能である。日本語の長い歴史において、温度感覚語彙の全体像を描くことが困難であるが、時間の推移による温度感覚語彙の使用の傾向を見出すことを、本書の目的とする。

2 本書の構成

本書は、以下の4つの章によって構成されている。以下に、各章の要旨を述べる。なお、先行研究について触れることはあるが、最小限にとどめる。

第2章 低温形容詞「寒し」と「冷たし」の歴史的変遷

——二語の連体形を中心に——

第2章では、「寒し」と「冷たし」は各時期においてどのような語彙を形容しているのかに注目する。ジャパンナレッジ版『新編 日本古典文学全集』を用いて、被形容語が比較的多く見られる連体形を対象として用例を収集し、考察する。現代語において、「寒い」と「冷たい」は二系統をなして、使い分けが見られる。歴史的な考察を行なっている先行研究のうち、巨視的にまとめているものは、山口仲美(1982)がある。山口(1982)は感覚・感情語彙の全体的な推移の傾向を明らかにしている。感覚語彙は意味的に永続性を持つのに対し、感情語彙は意味の変化が起こりやすいとされている。感覚語彙は意味が変わりにくいとされているが、「寒し」と「冷たし」両語の出現時期が異なるため、意味の重なりは必然的に起こると想定される。それぞれの形容語彙を調べ、細かく分類したうえ、使用上の接触と分化の様相を考察することを第2章で行なう。

第3章 歌に見る「寒し」——韻文における比喩用法に注目して——

第3章では、「寒し」の比喩用法に注目し、「比喩的表現」が多用されると予想される「歌」の類を調査資料とし、通時的に調査する。

蔡欣吟(2016)では、「寒し」を対象に、日本最古の和歌集である『万葉集』で調査した結果、比喩用法が多用されていることが見られる。また、第2章では、比喩用法を含め、歴史的に考察した。これらの結果をきっかけに、「寒し」が本来有する皮膚感覚より派生している使用はどのような意味合いが含まれているか、その使用はどのような様相を呈しているか、などの疑問点を持つようになっている。よって、第3章ではそれらの疑問点を究明することを目的とする。調

査資料に関して、第2章では比喩表現は主に『万葉集』で用いられ、『日本書紀』などの資料では使用がないと述べているが、資料の性格により、比喩表現が用いられやすいものがあることが考えられるため、本章では和歌、俳句、短歌と詩、および物語や随筆に記されている歌を調査対象となる。

第4章 風が寒く吹くのか——「寒し」の副詞用法に注目して——

第4章では、「寒し」の副詞用法に注目する。

第3章の調査では、「寒し」が副詞として働く使用の共起関係に現代語と異なるものがあることが見られる。現代語における使用状況について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用し、調査した結果、現代語では「さむい」の副詞用法と共起する述語動詞のうち、5例以上の使用は「なる」「感じる」「ある」「する」などである。第3章に見られる「風が寒く吹く」に類似する表現は見当たらない。上代から近代における「寒し」の副詞用法を調査することによって、現代語に至る変遷の様相を明らかにしたい。主として、歴史的な観点から見る「寒し」の副詞用法を使用する資料の性質、共起する述語動詞および働きの面から分類し、考察する。その使用傾向を見出すことを第4章の目的とする。本章の研究結果は、日本語の副詞に関する研究に資することを期待する。

第5章 「寒冷」と「冷寒」は完全な同義語なのか

——二字漢字表記語から見る温度感覚語彙——

第5章は温度感覚を表す漢字の使用に注目する。第2章から第4章は低温のみを考察対象としているが、本章は、低温の感覚を表す漢字「寒」「冷」「涼」、および高温の感覚を表す漢字「暑」「熱」「温」「暖」

によって構成される二字漢語表記語を通時的に考察する。

7つの漢字で二字漢語表記語を構成する場合、49通りの可能性があるが、実際存在しない語があると考えられる。また、字順転倒語は両方存在する場合、意味用法の相違があるか否かについては、本章の調査を通して、明らかにしたい。全体的に考察を行なったうえ、使用傾向の要因と理由は何かということについて考え、結論をつける。

終章

終章では、各章のまとめを行なったうえ、今後の課題について述べる。

3 使用するコーパスについて

本書はなるだけ多くの用例を収集するために、下記のデータベースを使用する。

① ジャパンナレッジ版『新編 日本古典文学全集』

ジャパンナレッジ(JapanKnowledge)は、小学館グループの株式会社ネットアドバンスが提供する、有料会員制の知識探索サイトで、事典・辞書を中心とする日本語データベースサービスである。また、収録されているコンテンツは多様である。書籍版『新編 日本古典文学全集』は1994年から2002年にかけて小学館より刊行され、全88巻ある。記紀・萬葉などの古代文学から近松・西鶴などの近世文学まで、263作品を網羅している。ジャパンナレッジ版では、書籍版と同様な形式で頭注・古典本文・現代語訳を同一画面に配置し、全文検索ができる。本書で行なうすべての調

査は、ジャパンナレッジ版『新編 日本古典文学全集』を使用する。

<<http://japanknowledge.com/>>

- ② 東京大学史料編纂所『古記録フルテキストデータベース』
- ③ 東京大学史料編纂所『古文書フルテキストデータベース』
- ④ 東京大学史料編纂所『奈良時代古文書フルテキストデータベース』
- ⑤ 東京大学史料編纂所『平安遺文フルテキストデータベース』

②～⑤は東京大学史料編纂所が1984年から作成してきたデータベースである。②は漢文日記の本文を全文データベースとするもの、③は中世文書を中心とするもの、④は『大日本古文書』(編年文書)の全文データベース、⑤は東京堂出版刊行の『平安遺文』で、竹内理三氏が編纂した平安時代古文書・金石文などの編年文書集である¹。第5章で使用する。

<<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>>

- ⑥ 明治学院大学デジタルアーカイブズ『デジタル和英語林集成』
明治学院大学が所蔵する幕末の洋学図書や、大学の学術研究で集めた図書をデジタル化、公開しているものである。第5章で使用する。

<<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/search/>>

- ⑦ 国立国語研究所『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』
国立国語研究所が構築している『日本語歴史コーパス』の一部である。検索システムは「中納言」を使う。第3章と第5章で使用

¹ ②～⑤の紹介の多くは東京大学史料編纂所のホームページによる。
<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html>、最終閲覧日：2018年7月15日

する。

<http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html>

- ⑧ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

国立国語研究所が構築しているコーパスで、収録対象の刊行年代が最大30年間(1976～2005)である。収録対象の刊行年代が最大30年間(1976～2005)で、ジャンルは書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などにまたがって1億430万語のデータを格納している。この膨大なデータベースを利用すれば、現代語の諸相はある程度把握できよう。検索システムは「中納言」を使う。第3章と第5章で使用する。

<http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/fee.html>

- ⑨ Google

代表的な検索エンジンサービス。第4章で使用する。

辞書類：

- ① ジャパンナレッジ版『日本国語大辞典 第二版』小学館
- ② 『大辞林』三省堂

本書では、以上のデータベースおよび辞書を利用し、日本語における温度感覚語彙を多様な側面から通時的に考察していく。